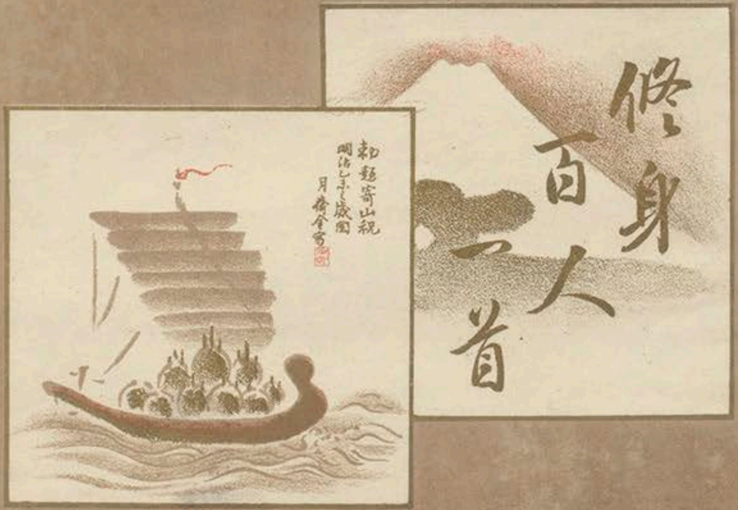
修身百人一首



脩身百首

君のため世の爲何か惜しからん
　捨てゝかひある命なりせば
　　　　　　　　　　中務卿宗尊親王

天皇の御爲、世人の爲に捨てゝ、其詮（カヒ）あるならば命は何か惜しからん惜しくあらずとなり
　　　　　　　　　　衣笠内大臣家長

大空に川邊の石も昇りつゝ
　星となるとも君は忘れじ

川邊に在る石が大空に昇りて星となるやうの變有りとも我が心の變りて天皇をば忘奉るやうの事は有らじとなり　此は神功皇后三韓を征し給ひし時に新羅王が「河石昇りて星辰と爲るに及ぶまで春秋の朝貢を闕き梳櫛（クシ）の貢を隘せば天神地祇共に罰し給へ」といひし誓詞を思ひてよまれしなめり
　　　　　　　　　　鎌倉右大臣實朝

山はさけ海はあせなん世なりとも
　君に二心我あらめやも

山は裂け海は淺くならん世の變に遇ふとも天皇に對し奉る我心は忠の一心の外に異心は有らんや有りはせじとなり
　　　　　　　　　　今奉部與曾布（イママツリベノヨソフ）

今日よりはかへりみなくて大君の
　醜（シコ）の御楯（ミタテ）といでたつ我れは

我は今日より家の事をも身の危ふき事をもかへりみる事なくて天皇の醜の御楯として出立つとなり醜は卑下していへる也楯は箭を防ぐものにて天皇を護衛し奉ることをかくいふ也

ますらをがとり佩く太刀のつかの間も　御楯とならん心忘るな　　青木永章

丈夫たる者は少しの間も天皇の御楯となる事を忘るなとなり取佩く太刀のはつかといハんための序にて柄に少をかけたり

勅なれば身をばよせてきもの丶ふの　八十氏川の瀬には立たねど　　鐵月房

吾は僧にて武人の数には入らねども勅命なれば後鳥羽院の也官軍に加はりきと也此は此房を捕りて首斬らんとせし北條賊も感じて命助けし哥なり

君がため朝夕つとめ志まりてな　ふた世はゆかぬこのうつし身を　　矢野玄道

二度と生れて来られぬ此現在身なれば労苦を厭はず天皇の御為に晝夜怠慢なく勉勵為んとなり

人の子の親となりてぞわが親の　思はいとゞおもひ知らるゝ　　縣賢王母

親の子を思ふ慈愛心の深厚なる事は吾も子をもちていよいよ思知らると也人の子は、ただ、子といふ事なり親を人の親といふに同じ

物ごとにくやしくもあるかかぞいろの　いさめしことを思知らずて　　三條内大臣實枝

父母が何くれの事につきて誡給ひし事を其ころハ理ありとも思知らずして其教戒に従はざりしか今になりて悔しとなり

たらちねの在りし其世にあはれなど　思ふばかりもつかへざりけん　　天台座主道玄

親が世に在りし時になぞて充分孝養せざりけんと悔みたる也たらちねハ親の枕詞なれども轉じては親のことをいへり三の句はア、ナニユヱニなり

白がねもこがねも玉も何せんに　まされる寶子にしかめやも　　山上憶良

金も銀も玉も與ふべき子なくば何に為んこれらも他にまさりたる寶なれども子に及ばんやも及ばずとなり

父母の進みさき立ちよきみちに　ゆかば其子も行かざらめやは　　源成勝

此は父正しければ子も亦正し父たる者ハ必身を正しくして以て其子を律せよといふ眞正山の語を譯したる也結句は行かずあらんや行くといふ意なり

親はよし親たらずとも我や子の　子たらん道をつくさざらめや　　平田篤胤

親はたとひ親たる道を盡されずとも子は子たる道を盡さずあらめや盡せとなり

筆とれと教へし親の言の葉を　なぞて硯のうみわたりなん　　清水濱臣

書の習ひにつきても幼き時によくよく手を習へと親が教へられしを、きかざり

し事を悼みたる也硯面の凹きところを海といふ其海に催をいひかけたり

惜しからぬ身ぞをしまるゝたらちねの
　親の遺せる形見と思へば　　元政法師

不惜身命の敎によりて惜くなき僧の身なれども親の遺体と思へば惜しまるゝ事よとなり

思ひしる今のこゝろを盡そべく
　親ありし世に世はかへらなん　　城戸千楯

親たちの慈恩の深厚なりし事を今思知りたり此心を盡して孝養せらるべく親の現存せられし世に立ちかへりてくれとなり

□□躬之

おろかにも嬉しきことのあるごとに
　親しあらばと思ひけるかな　　少將松平定信

我身に關し事の有る度毎に親の在しなば喜ばれんものをと戀しく思はるゝ、愚さより初句は然れもふとも詮ふきとにて愚なる事ながらといふ意かなほ考ふべし

埋火れあたりのどかにはらからの
　まとゐせし世ぞ戀しかりける　　小澤蘆庵

今ハ兄弟死亡せて世に存れるが無きにつきても昔爐邊に寄集りて心靜に物語らひし事を思へば其世が戀しとなり

春日野のはらからこそそ世の中の
　うきたの森のなげきをもとへ　　櫻井田忠友

身の憂苦を他人ハ知らず與すれど兄弟こそハ聞ひもし助けもしてたのもしきを也ハらからのハらを原に憂きを森の名にいひかけたり

夫婦となるみちれ大道浮橋の
　かるきこととそ思はざらなん　　伊勢

男女が夫婦となる道ハ伊邪那岐神伊邪那美神のはじめ給ひし重き大道なるぞ輕き樂と思ふなとなり浮橋のは古今集序の古注に天の浮橋の下にて婦神夫神となり給へる云々とあるを採りたるにて浮橋の如く輕きといひかけたりことゝとは事と言語をかねいへるなり

あしのやのこやれしのやの忍にも
　いないなまろは人の妻なり　　野之口隆正

我を戀ふる男に人に知られぬやうに忍びて逢はんかイヤイヤ我ハ人の妻なり然る道ならぬ事をすべきにあらずとなり初二句の蘆の屋の小屋の篠屋のはしのといはん序にて篠を忍にいひかけたり

親はらからつま子たゞしくむつましく
　くらそにまさるたのしみぞなき　　阿闍梨契沖

世に樂ハ數知らず多けれど親子兄弟夫婦が正しく睦しくして世を經る樂に勝る樂はなしとなり

あさるとてれのが友よぶ庭つ鳥
　とりまもしかな人の心は

雞が飼主の蒔きくれたる米麥などを求食る時は其友を呼ぶなるが利を見れば友を棄て、己獨得んとする人の心は其雞にも劣れりとなり

稲岡秋平

世のなかの人のこゝろも見ゆめれば
友こそ人のともかゞみなれ

甲の人がらハ其の交はる乙の人がらを視て知らるゝものなり然れば友を擇ぶべしと也友鏡とは彼レと此レとを照合せて見るをいふ

尾崎正明

むら竹の風ふきしろふ友なりは
聞きよくもあらぬ心してまし

友だちのくみあひて爭ふは叢竹の風に吹かれて軋合ふ如くにて聞きよくもなき物なれば然る事の無きやうに注意してんとなり

大槻季夫

何事も足らぬほどぞよしの山
盛過ぐれば花も散るなり

吉野山の花も盛過ぐれば散るなり人も物事不足なるがよしとなり

□□千浦

身のほどを思ひしらでよききぬに
心をとむる人ぞはかなき

身分を量らで不相應なる美服を着たく思ふハシタナキ人ぞとなり

飯田年平

神代より色もかはらぬ大空の
廣き心をこゝろともがな

大空は太古より色だに變らずしていと廣きが人も心をその如く持ちたしとなり

前波默軒

物といふ物をそだてゝわづらひぬ
地の心をこゝろともがな

大地は万物を養育して煩はしげもなきが吾が心をその如く爲たしとなり

加藤成樹

おしなべていとけなきをば子と思ひ
老いたる人を親とたのまん

親疎の別なく幼き人を吾が子と思ひて愛しもし教へもし老人を吾が親と思ひて敬ひもし教をも乞はんとなり

物集高世

人の親の心は誰もおなじこと
わが子のみやはかなしと思はん

子を愛する親の心ハ誰も皆同じ事なれば其心を思ひやりて我子のみならず他人の子をも愛せんとなりかなしは悲にあらず愛の字にあたる古言なり

加藤枝直

野邊に生ふるいさゝむら竹いさゝめも
人の爲よきことばかりせよ

假初にも人の爲になるよき事を計畫せよとなり野邊に生ふる細少叢竹はいさゝめもといはんための序なり

野之口正武

人のためよき事を世になしおきて
ますらをの名をとゞめてしがな

人のためによき事をなしてその功を世に殘置きて丈夫の名を後世に留めたしとなり

前中納定房

一筋に人をも身をも思ふかな
　打つ墨縄の直かれとのみ

人も我も邪曲むことなく工匠の打つ墨縄の如く正直くあれとのみ思ふとなり
一筋にハ墨縄の縁語なり

里井孝幹

をしけれど我は手折らじ深山路の
　散らん櫻もぬしと知らねば

深山路に咲きたる櫻が人に見られずて散果てんとの惜しければ家づとに一枝と思へど其主を知らねば同伴の人は折りつれど我は手折らじとなり

寂身法師

手折らじな人の垣根の梅の花
　それにて知りぬをしき心は

人の垣ねに咲きたる梅花のあまり美しければ一枝ほしけれど我庭の花を惜む心を推して人の心も知らるれば手折らじとなり

兼好法師

人目をばいとひやすると山里の
　あるじもきて花を見る哉

山里に遁住めれば人に逢ふとを厭ふらんと思へば主人ハ訪ハで其家の花のみを見るとなり

後亀山天皇

あつめては國の光となりやせん
　わが窓照らすよその螢は

此はもろこしの車胤が家貧しければ螢を聚めて其火を燈火に代へて夜學せし故事によりて朕が夜學も大成せば國を照らす光となりなんかとよませ給ひしなり

服部敏夏

よる光る玉にも書てまそ鏡
　見ぬ世をさやに照らすと思へば

我が見知らぬ過去の世を明亮に照して見すと思へば書籍は夜光の玉にも勝さるとなり玉にも勝すといひて其マスを眞澄鏡にいひかけて其鏡の縁語にて明
亮は照らすなどいひたり

本居宣長

するまゝに濃くなるおのが色見せて
　墨もまなびの道をしへけり

するに隨ひて濃くなる己が色を見せてこれと同じ理なれば勉強せよと墨が學問の方を教へけりとなり

田中正芳

月花のあだ目をかたくとぢ置きて
　いざ怠らず書よまさらん

月や花やなど見て光陰を費すハ無益なれば其目を堅く閉置きてドヤヤ有益な讀る書のために費さんとなり

細井芳秀

かき殘す筆のすさびに知られけり
　見ぬもろこしの人の心も

目に見ぬ唐土の人の心も、すさみにかきのこしたる書にて知られけりとなりげにさることとなるにつきてもふに物書くにハ注意すべきとなり

石原正明

難波津にをり立たまうく思ひしや
　今のあしでのねざしなりけん

今我が書の拙きは幼少の時に手習する事を物憂く思ひて怠りしにもとならん

となり難波津に云々古體習字の始には「難波津に咲くやこの花冬籠り今を春べと咲くやこの花」といふ哥と淺香山云々の哥とを書習ひしなればかくいへりあしでハ哥など書くに文字をくづして蘆の生亂れたる状になぞらへて書くをいふこれを惡手にいひかけたり

なりはひにいそしむ道の奥にこそ
　こがね花咲く山はありけれ
千家尊福

家業に勉强すれば富を得といふ事を万葉集なる長哥に「陸奥山に金花咲く」といふ句あるをとりてよめるなり

横みちに得たるこがねの花はたゞ
　一さかりにてうつろひにけり
千家尊晴

不義非道なる所業にて得たる金を花に譬へてさる花はたゞ一盛にて散るものぞとなり

皆人の心もみがけ千とせやふる
　神の鏡の曇る時なく
後醍醐天皇

人の心ハともすれば曇るものなれば神鏡の如く曇る時なきやうに磨けと教給へるなりちはやふるハ神の枕詞也

磨得て國の寶となるものは
　人のこゝろの玉にぞありける
僧月照

光明を放つほどに磨き得れば國益を爲して無比の寶となるものは人の心の玉なりとなりこゝろの玉とは心を玉にたとへたるなり

曇らせじ疵あらせじの心こそ
　玉にもまさる寶なりけれ
夏目琉珠

玉を曇らせじ疵あらせじと愛重する其心こそかへりて玉に勝さりたる寶なれとなり

大空をめぐる月日のあらましも
　思ひはかるぞ心なりけり
けんげい法師

目には見ゆれど手には取られぬ大陽大陰の大空を旋る日數の概略をも思量りて知るハ心なりされハよく啓發せよとなり大陽も大空を旋るものと思ひあやまりしといへるなどは天學の精しからざりし世の哥なればなり

かたちこそみやまがくれの朽木なれ
　心は花になさばなりなん
伴蒿蹊

容貌こそ深山の奥の朽木の如くなれ心ハ花の如く美しくなさばならんとなり

よしあしのうつるならひを思ふにも
　あやふき物は心なりけり
中松克正

人の善事を見もし聞きもしては我が意もそれにうつりて善事を爲さんと思ひ他の悪事を常に見馴れ聞きなるれば最初ハ厭惡ひし我眞心もおのづから失せゆきて自身の行に悪事のまじるもの也かく心は移易く危き物なればよく眞心を養立てよとなり

ともすれば大土さへにゆらぐなり
　人の心のたのむべきかは

動かぬ物の例に爲る大地さへ搖動する事あればましてや人心ハ變動すればた

のむべきかは、たのむべきとにあらずとなり（大地を大つちといふ事萬葉集に見ゆ）

ともすれば手習ふ子等のそる墨の
ゆがみがちにもなる心哉　小山敬容

人はドウカスルト手習する子等の贈る墨の如くみ歪みがちなる物なれば用心すべしとなり

久方の雲ゐに見ゆる富士のねの
高きを人の心ともがな　岡崎秀雄

人の心を雲際に聳えて見ゆる富士山の峰の如く高くもちたしとなり久方のは枕詞なり

いかばかりやさしからましまそ鏡
人の心のうつらましかば　三宅公輔

形を寫す鏡に其人のうつらばドレクラヰ恥かしからんとなり眞澄鏡とは殊に澄みて明かなる鏡をいふやさしは恥かし也從順をいふは後に轉ぜしなり

身の病くすりしつゝも心には
くすりをせざる人ぞしれ人　小河一敏

身の病は療治しながら身より重き心の病を療治せぬ人ぞ痴人（シレ）なるとなり療治する人をクスリスといふは古語なり

濁るてふ事なくもがなあしびきの
山井の水の淺き心も　古川躬行

山井は深からねどよく清（ス）みたる物なり其山井の如く淺き我が意も濁るといふ事なくありたしとなり

道ならぬ道もこそ行け心して
心の駒をつなぎとめねば　鹽津春樹

常に注意して心の駒を繋止めずば道にあらぬ道に踏入るべしと也法苑珠林に「意馬心猿」古哥に「ひかれなばあしきみちにも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな」などあるによりてよめるなり

人ばかり劣りもせじ月も日も
なにかむかしの空にかはれる　伊藤維穎

世を照らす月も日もいかでか昔の日月に變らん決して變なしされば人のみ古人に劣る理なしとて今人古人に及ばずなどいひおもふ人を獎勵したるなり

わりなしや人こそ人といはざらめ
みづから身をや思ひすつべき　紫式部

他人よりは輕蔑して人數に入れずともみづから智も德もなしと棄つべき事かは棄つべき事にあらず然るを自棄するは道理なしと歎じたり

たまたまに人とある世をうき時は
そむかまほしく思ふはかなさ　加茂眞淵

人間に生るゝことは難（カタ）しといふ然るにたまたまに生れ來たる此世を身に愁を事のある時に死なんと思ふは甚はかなき事也となり、萬葉集に「人となる事は難きを」また「わくらはに人とある身」などよめり

□□綠明

あるかぎり底のさゝれの數見えて
　流るゝ水をこゝろともせん

いと清き川水の滯る事なく流るゝによりて其底にあるだけの小石の數もよまるゝほどに能く見ゆ也其川水の如くに吾心を持たんとなり

荷田春滿

なかなかに色どる筆ぞおとりける
　たゞ墨がきの心高さよ

此は淡飾を彩色畫に朴實を墨畫に譬へたるにて高尙なる墨畫には彩色畫が却て劣るとなり

岩崎安浪

ますらをは身をしとぐべし劍太刀
　花うるしもて鞘塗らずとも

心を刀身にたとへ衣服を刀鞘に譬へて外飾はせずとも內に德を修め智研けとなり

從二位爲子

心だに吾が思ふにはかなはぬを
　人を恨みん事ぞわりなき

吾が心さへ吾が思ふまゝにならぬを況や他人が吾が心に適(カナ)はぬとて恨みんは無理なりとなり

山內繁樹

天雲のいゆきはゞかる高峯にも
　登ればのぼるみちはありけり

空行く雲の支(サヽ)へられて滯るほどの高峯にも登るべき路を得れば登らるゝものなれば打見には難げに見ゆる事業も其方を得てすれば成るものぞとなり

岸本弓弦

高しとてのぼらざりせばこのひと木
　それもしこそはみねのもみぢば

此山高しとて險阻に怖ぢて登らずば如此珍らしき峰の楓樹を、得見ざりけんを、つとめて登りしかひありけり物事皆同じ理なりと也峰(ミネ)に不見(ミズ)をいひかけたり

熊谷直好

はるばると望めば遠き海原も
　渡ればわたる路もありけり

見わたせば際限(ナ)も無げにて甚(イト)も遙に遠き海原なれども勤めて渡れば渡りえらるゝ路はあるものぞされば物事難しとて落膽すべからず

本居大平

風潮の時を待得て思ふこと
　なるとの海も渡りこそそれ

船人が佈長(オサ)る、鳴門の海も風と潮との適ひたる時を待ちて渡る也人も我も成さんと思ふ事も其時の到るを待ちて成すべし然らずては其事成らじと也成就(ナル)と鳴門(ナルト)をいひかけたり

大伴宿禰家持

ますらをは名をし立つべし後の世に
　聞繼ぐ人も語りつぐがね

丈夫は功を成して後人が其名を聞きてまた後人に語繼ぐやうに美名を立つべし

六人部是香

よろづ代のかたみ殘さではかもなき
　木竹のつらに世を過ぐさめや

萬代に遺(ノコ)る功蹟を立てずして竹木と同じ類にはかなく世を過ぐさめや過すべ

き事にあらずと也

まがねもてゑれる硯はくぼむとも
立てし心をかへんものかは

□□寛　名

鉄にて鋳りたる硯は千度萬度墨硎るとも凹きし、よし〳〵や凹むとも吾が立てたる心は變ずるものかは變ぜじとなり

何か世をかたきものとてわび居らん
雫の穿つ石もありけり

中島宣門

何かは世の事を難きものなりとてわび居んわび居るべきとにあらず雫すら堅き石に穴を穿つなりとなり

なす事はよるひるといはず行く川の
水のこゝろに入習ひてよ

服部蒼雄

夜も晝も絶間なく流行く川水の心ゆ習ひて事を爲すに怠るなとなり

竹の根の下ともひわたるふしの間も
今日の日かげをあだにくらそな

加藤千蔭

地ゆ這ひわたれる竹の根の節の間は甚短き物あるが其如く短き間も今日の日かげを惜みて徒ゆ暮するなとなり

けふもまたむなしく暮れぬ入相の
かねておもひし事もはたさで

高島式部

豫想せし事も成しはたさで今日も徒に暮了ぬとなり入相の鐘ハ夕告ぐる鐘なり鐘を豫ねいひかけたり

よるひるの色分く石を手に觸れて
うつろふ時を知らぬやあるらん

香川景樹

晝夜の色分く石とハ黒白の碁石をたとへいへる也圍碁すとて其石を手に觸れながら金玉にも比しつべき光陰の徒に過ぐるを知らずあるかいと惘なる事なりとなり

いかにせん宿の蚊ばしら霜柱
たゞ時のまゝたちかへる世を

近藤芳樹

夏なりと思ふ間に冬の來て瞬時に一年經ぬ世をいかにせん光陰を惜みて勉强する外なしとなり蚊柱とは千萬の蚊が軒端なぞに群飛びて柱の如くなるをいひ霜ばしらとは嚴寒の頃に地面霜の爲に凍りて脹れて起立つ物をいふ結句のたちハ月日の經過と柱の立とをかねいへり

いつのまに杖つくばかりありにけん
老ともわしとき物よぞありける

海野遊翁

まだ若しと思へるゆいつの間に杖つくほどに老いぬけん老といふものは疾き物なりとなり

玉くしげ箱根の元湯もとをしも
忘れし病何にいやさん

渡邊重春

人が物事の本を忘れて末に走る病は箱根の温泉にても癒ねど何に癒やさんと慨歎せし也玉櫛笥ハ箱の枕詞なり

ゆるさじと逢が關をすゑおかば

片岡寛光

風だにいかでやすく越ゆべき

よもぎが嗣とハ灸に譬へ風とは風邪をいへるにて衛生を勧めたりいかでやすく越ゆべきは、いかでかはやすく越ゆべき、え越えじと也

中林古樹

とにかくふながらへてまし思ふ事
成るも命のありてなりけり

ドウシテなりとも艱苦患難に堪へて生存して居ん命ありてこそ志望の成就をみる時もあれとなり

小川眞實

ふちは瀬にかはると聞けばあすか川
しづみし身こそたのみありけれ

これは古今集に「世のなかは何が常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日ハ瀬となる」とある歌によりてよめるにて今日かく貧に沈みたる身も明日ハ富みぬべしとのたのみありと自慰めたるなり

多々良義弘

ひとへなる人もぞあるとよをしれば
うすき衾も冴えぬ夜ぞ哉

世には此寒夜にも單衣着て居る者もぞあると其貧苦を思ひ歎きながら衾着て寐る身ハ冴えぬと思はずとなり

□□治監

かの山は朝日照らせり此岳も
時雨降るなりあはれ世の中

彼山には朝日照りてあるに此岳には時雨降りてあり今日はかくあれど此岳に朝日照り彼山に時雨降る日もあるべしアヽ[illegible]人もこれに似て盛衰さまざま也となり然れば盛なりとて誇るべからず衰へたりとて歎くべからず

伊達千廣

岩が根のこゝしき山の箱根路も
ならせばなれて人は越ゆるや

岩石の嶮しき箱根の山路も其岩石を踏平せば人は越えずやはあるよく馴れて越ゆる也成難き事も同じ理にて方を得てすれば易しとなり

中島廣足

買ふ人もあらぬ市路に立ちいで、
むなしき名のみ賣らんと爲らん

身に智徳の實なくして虚名のみ得んと爲らん人は憫むべしとなり賣買といひ市路などいへるは虚名を商品に譬へていへるなり

足代弘訓

紅の濃染（コゾメ）の梅を見ても知れ
色あるものは實はなかりけり

口に喋々しく情ありげにいふ人には却りて心に其實無き事色は美しけれど實の無き紅梅を觀て推察せよとなり

紫性法師

底ひなき淵やは騒ぐ山川の
淺き瀬にこそあだ波は立て

山の川の淺き瀬こそザワザワと波は立つものなれ底の無きやうなる深き淵は騒ぐか決して騒がずとなり此は古今集戀部の歌なれど淺く揣き學藝に誇る人の戒になりぬべければとりつ

近藤光輔

思ふ事とはずがたりの舌とさに
あさき心のほどを知る哉

己の思ふ事を人の問ひもせぬに語の喋々しさに其人の心の愚鈍なる事を知るとなり

□□永宗

山吹の實なき言葉の花よりも
たゞ口なしの色ぞゆかしき

言語のみ美しくして實意なき人よりは物云いはねど深情ある人が慕しといふとを山吹と梔子(クチナシ)とに譬へたり

岩崎美隆

人のうへと聞繼ぐ人のまたがたり
ひがこと草れ根を深めつゝ

人の身の上の事を聞きたる甲が乙に語り乙が丙に語る間に誤りつゝ遂には甚しく實事に違行くものなれば然る事は注意して聞くべしとなり誤をひがこと草といふよりその緣語にて根を深むなどいへり

長澤伴雄

我が門にねほれし犬のそらなきは
里とよむまでなりよけるかな

我が門にて寢惚けし犬があやしむべき實物も無きに吠えしかば數多の犬も吠ねて其聲一里を響動(トヨモ)したりとなり此は一犬虚を吠ねて萬犬實を傳ふとかいへるを思ひてよめるなるべし

伴信友

いたづらに思ひあがりて鳴く雲雀
もとのねぐらの野をな忘れそ

貧賤より出で、富貴に成れる人に、もと貧しく賤しかりし事を忘るゝことなかれとの意を雲雀に譬へていへりねぐらは寢處をいふ

高山慶孝

かへりみよ老の心のくねり松
まつも昔とかゝらざりしを

老松のくねりゆがみたるを見ても吾も年老いて心のくねりたらん人も松も若くありし昔は如此あらざりしものをとかへりみよとなり

太田道灌

いそがねば濡れざらましを旅人の
あとよりはるゝ野路のむらさめ

村雨(ムラ)は一頻づゝ強く降れど間もなく霽るゝ物なり然れば旅人も急がずに雨やどりして暫時待ちなば濡れずあらんものを急行(イソ)ぎし跡にてやがて霽れたりとなり

香川景樹

よの中はかくぞ悲しき山ざくら
散りしかげにはよる人もなし

山櫻の咲きてある時は見んとて人多く來しかども散果てゝ木蔭にはよりくる人なし世の人情も如此ありて富榮ゆれば他人も親しめども衰ふれば親族も疎くなるが悲しき事なりとなり

村田春海

かくろひて流きそめしも末つひゐ
世にあらそる、谷川の水

岩かげ或は草などに隱れて流れそめし谷川の水も末は遂に世に顯はるゝ如く人の行の善惡もまた同じく注意すべしとなり

在原業平

今ぞ知る苦しき物と人待たん
里をばかれずとふべかりけり

人を待つ事は苦しきものなりといふ事を今日始めて知りつされば今より人を

待居る所へはブチャタセズニ早く行べき事なりと也

黒澤翁滿

心せよよきもあしきもほどほどに
物のむくいはある世なりけり

善事にも悪事にも其の大小に應じて報ある世なれば注意せよとなり

明治廿八年十二月廿二日印刷
同　年十二月廿七日發行

版權所有

編輯兼發行者　大阪市西區靱下通壹丁目四十八番屋敷一成舍　寺木保之助
印刷者　瀬戸清次郎

出陣まえに　たがためあまきぬく
四葉あさめ　てらなければ
目散を何めても

木本齋治郎

大日本帝國戰闘用鐵艦
一萬四千頓　馬力當十號

艦長　正一位　勲一等　大勲位　皇族
木本宮常仁親王殿下

任　海軍大將　正一位　大勲位　皇族

授章功一級　金鵄勲章、菊花章、寶冠章、瑞寶章
旭日章　大勲位章、

合計　五五年

任　陸軍參謀總長　大勲位　皇族
木本宮常仁親王殿下

任　大日本帝國君主
今上天皇陛下　定常天

木本宮殿下　今上天皇下定山
萬々歳　天下太平

跡見学園女子大学短期大学部図書館
☎03(3943)1368
1001817822

...ere ther is a will
there is a way.

T. Kimoto

木本常治郎

Where ther is a will

there is a way.

T. Kimoto

木本常次郎